

16. イペットS[®](タヒボ含有食品)を用いた犬2例の治療経験

○山我 義則¹⁾、片野 修一²⁾、宮 賢次郎²⁾、大川 博³⁾

¹⁾エルム動物クリニック(新潟県)、²⁾カタノ動物病院(新潟県)、³⁾スケアクロウ(株)

【はじめに】 西洋現代医学領域において、健康補助食品(サプリメント)、灸、鍼、ヨガ、音楽療法といったものは、科学的未検証と臨床実応用の医療体系の総称として補完代替医療といわれている。南米アマゾン原産の樹木:「タヒボ」に含まれる「NQ801[®]」という成分が、ガン細胞を抑制し正常細胞には影響を与えない選択毒性を有し、転移浸潤抑制、アポトーシス誘導、血管新生障害作用を有すると報告され、医療現場ではガン治療における補完代替として利用されている。今回、サプリメントであるイペットS[®](タヒボエキスを1錠中 150mg含有)を犬の2症例に投与する機会を得たので、その治療経験について報告する。

【症例1】 ヨークシャー・テリア、去勢雄、15 歳齢、4.4kg。主訴:発咳と軟～下痢便。血液生化学:ALT=158、ALP=1,168、GGT=28、X線:気管狭窄、肝腫大、超音波:胆嚢内にマセコーを、その周囲の肝実質や胆嚢壁は異常エコーを呈した。肝胆道系腫瘍と仮診断し、年齢などから手術は不適応と判断した。そこで、利胆剤とイペットS[®]2錠/日を処方し、異常所見は徐々に改善された。第 267 病日にはALT=30、ALP=190、GGT=13 となり、超音波の異常所見は消失し、イペットS[®]も1錠/日に減量した。その後、低比重尿がみられ、慢性腎臓病の内科療法と本剤 1 錠/日投与を併用した。現在、初診より2年以上経過したが、本症例のQOLは維持されている。

【症例2】 ミニチュア・ダックスフント、雌、7歳齢、5.4kg。初診時、全身性発熱、乳腺部位の急激な腫大と熱感により炎症を伴う乳腺腫瘍と仮診断した。抗菌薬、消炎酵素薬および非ステロイド性抗炎症薬(NSAID)の投与に加え、イペットS[®]3錠/日の経口投与を行った。これにより、臨床症状が改善したので、徐々に抗菌剤および消炎剤の投与を中止し、NSAIDとイペットS[®]2錠/日の投与を継続した。しかしながら、乳腺腫瘍の大きさや数は次第に増加していった。その後、子宮蓄膿症と重度の貧血を併発し、卵巣子宮全摘出を行った。この外科処置に加え、NSAIDとイペットS[®]の投与を継続したところ、貧血もほぼ改善し、一般状態が良好となった。本症例は、初診より2年以上経過し、現在でもNSAIDとイペットS[®]の併用経口投与を行っているが、定期的な身体一般および血液・生化学検査などに異常は認められず、乳腺腫瘍の大きさや数も減少してきている。

